

04 西洋建築の出現

明治初期は、西洋化された建物・街並みを作る上で、海外から招かれた外国人建築家が設計を行っていました。明治4(1871)年に、日本人の技術官僚の育成を目指し、工学寮(東京大学工学部の前身)が設置されました。工学寮は、明治10(1877)年に工部大学校と改称され、造家学科(後の

建築学科)を卒業した建築家が日本各地で活躍しました。

明治12(1879)年に、建築家ジョサイア・コンドルから学んだ一期生4名が卒業しました。日本の建築文化を牽引する建築家が輩出され、当時の東京では西洋建築が次々と出現しました。



ジョサイア・コンドル 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻所蔵 イギリス出身の建築家。教育者として日本の建築学の礎を築きました。明治10(1877)年から工部大学校造家学科の教授を務め、自身も鹿鳴館(ろくめいかん)や三菱一号館など、明治期を代表する西洋建築を創出しました。



工部大学校第一回卒業生 個人蔵 明治12(1879)年の第一回卒業式で、辰野金吾(たつの きんご)、片山東熊(かたやま とうくま)、曾禰達蔵(そね たつぞう)、佐立七次郎(さたち しちじろう)の四名が造家学科を卒業し、日本の建築文化の形成に大きく寄与しました。(前列:左より1番目・2番目が佐立・片山、後列:左より3番目・4番目が曾禰・辰野)



三菱一号館 三菱一号館美術館所蔵 三菱一号館は、ジョサイア・コンドルの代表作の1つで、煉瓦造3階建の事務所建築として明治27(1894)年に丸の内に完成し、丸の内の赤レンガ建築の発端となりました。昭和43(1968)年に老朽化により解体されましたが、平成22(2010)年に「三菱一号館美術館」として復元されました。



日本銀行本店 辰野金吾は、造家学科を首席で卒業した人物で、ジョサイア・コンドルの後任として造家学科の教授を務めました。日本銀行本店は、古代ギリシャ・ローマの建築を模範として設計されており、中央区日本橋に現存しています(国の重要文化財や、東京建築士会の「東京の建築遺産50選」に認定)。辰野はほかにも、東京駅舎[大正3(1914)年完成]等、東京のみならず全国の重要施設の設計に携わりました。提供:東京工業大学 藤田研究室



赤坂離宮(現・赤坂離宮迎賓館) 片山東熊の設計。片山は、各地の宮廷・博物館・記念建造物などの建築に生涯にわたって携わりました。赤坂離宮は、東宮(後の大正天皇)御所として計画されたもので、10年の歳月をかけて建設されました。創建100年後の2009年に国宝に指定されています。出典:内閣府迎賓館



京橋明治屋ビル 曾禰達蔵の設計によるルネサンス様式の建築で、地下鉄の駅と一体化して建設された民間建造物として現存する最古のもの。平成21(2009)年に中央区の有形文化財として指定されています。



日本水準原点標庫 佐立七次郎による設計のもと、日本の統一的な標高を決定するための基準として参謀本部構内(現・千代田区永田町)に設置されました。現在も公的建造物として使用されています。



和洋折衷建築 東京築地ホテル館

- 明治時代に入り、西洋技術が本格的に受容されるまでは、江戸時代からの建築文化を引き継ぐ棟梁や職人たちによって、和風と洋風の意匠が合せ用いられた「和洋折衷」による建築が登場しました。明治元(1868)年に、東京に来訪する外国人のための宿泊・交易場として建設された東京築地ホテル館は、その最初期の建築です。新橋駅や横浜駅を設計した外国人技師のリチャード・ブリジェンスによる設計、江戸幕府御用達の大工棟梁であった清水喜助の弟子・二代目清水喜助(藤沢清七)による工事の下、建設・運営されました。
- 和洋折衷建築は、錦絵に多く描かれるなど、市井の人々の関心を惹きつけ、江戸から明治に時代が移る中で、古い文化を残しながらも新しい文化の到来を予感させるものでした。



東京築地ホテル館を描いた錦絵 都立中央図書館特別文庫室所蔵 設計の特徴としては、左右対称型の平面計画がなされ、中央部分に塔屋をもつ意匠、アーチ型の門などは洋風の考え方を反映しています。一方、庭園部分は和風になっており、塔屋部分の花頭窓(かとうまど:日本の伝統建築にみられる外枠が花型に作られた窓)、外壁はなまこ壁(壁面に平瓦を貼り付け、瓦の継ぎ目に漆喰をかまぼこ型に盛り付けるといった日本の伝統的な壁塗りの様式)が採用され、和風の要素が随所に盛り込まれていました。